

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

No.3 1996.3



「眠る男」と朔太郎

先日、映画「眠る男」を岩波ホールで観た。これは群馬県の人口が二〇〇万人を突破したことを記念する事業として企画され、同県出身の小栗康平が監督している。すでにご覧のむきも多いだろうが、これがじつに胸に沁みる美しい映画に仕上がっている。

あれはいつたい群馬のどこだろう。山あいの河にそつて「一筋町」がある。この町の古い農家に一人の男が眠り続けている。男は外国を彷徨した後にこの町へ戻るが、あるとき山で事故にあい意識を失ったのだ。カメラはこの横臥するだけの一人の「眠る男」を中心において、その周辺で営まれる人々のつましい日常をたんたと映し出していく。そこに山があり、森があり、河があり、季節は静かにめぐる。なんとそれだけの映画であるのだが、それがなんとも心動かされるのだ。

ついにひとことも発することなくただもう眠るのみにしていつか息をひきとっている男。おおよそ主人公にふさわしからぬかれを主人公にした。ここにこ

の監督の非凡さがあり、またこの映画の成功があるう。ところでいつたいその着想はどこからえたのか。わたしはこのことに関わっておもいたすのである。ひよつとしてそれは朔太郎からではないかと。

そのゆえんは映画の一シーンにある。ご覧になったかたは憶えておいでだろう。ここでは高校の演劇部の生徒たちが重要な役割を演じている。物語のなかほど、ある夜、前橋市(?)のシャッターを下ろしたアーケードの繁華街、練習帰りのかれらが詩を朗唱しあう。いやその詩がそうあの朔太郎の「猫」なのだ。

まつくろけの猫が二疋、

なやましいよるの屋根のうへで、

びんとたてた尻尾のさきから、

糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

「おわあ、こんばんは」

「おわあ、こんばんは」



正津勉

●しょうづ べん

1945(昭和20)年福井県大野市生まれ。同志社大学文学部社会学科卒業。

1972年に第一詩集「惨事」を上梓。以後、詩作活動に専念。1980~81年には渡米しアイオワ大学・オークランド大学の客員詩人となる。ほかにオーストラリア、メキシコなどで講演、朗読を行う。

詩集に昨春秋に刊行の「笑う男」ほか、共同詩集・散文集など多数。

昨年末に前橋文学館において第4回文学館講座「詩の味方—詩の読みかた 詩の書きかた—」を担当、好評のうちに終了した。

「おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ、」
「おわああ、ここの家の主人は病気です」

屋根の上でなやましく鳴きかわす恋猫たち。屋根の下でしんと臥ふしている病気の主人。そしてそれらの高くにある糸のような三日月。どのようなものか、

ここに「眠る男」を重ねたら、ちがうだろうか。それはさて、わたしなどはこれを小栗康平が郷土の大詩人にした挨拶あいさつのシーンとみるのだが、いかがなものか。
「眠る男」拓次の夢のなかではきつと朔太郎が生きているのである。